

民主主義の「夢」

中山 元著

ハンナ・アレント〈世界への愛〉

その思想と生涯

ナチスによって故国ドイツを負われた「命ユダヤ人の女性哲学者ハンナ・アレントは、自らの著『人間の条件』のタイトルを、「世界への愛（アモール・ムンディ）」とするよう望んでいた。この印象的なエピソードから本書は出発する。そして本書は、この「世界への愛」を導きの糸として、アレントの政治思想の根源を詳らかにしようとしている。

近年、アレントの思想に関する注目がつとに高まっていることは論を俟たない。彼女の書いたものはそのかなりの部分が日本語で読めるようになっているし、彼女の思想・人間像にかかわるノングラフも数多く出版されている。また、昨年には彼女の生涯を扱った映画が公開されたことも記憶に新しい。この意味で、アレントに関する注目の

高まりは、こと日本に限

定されるものではなく、世界的な広がりを有していると言えるかもしれない。しかし、なぜ今アレントなのか。一体彼女の何がここまで多くの人を引き付けるのだろうか。本書はこうした疑問に答えるものにもなっている。

本書は二部構成を採用している。第一部は、アレントの視点を通じた西洋政治思想史の再解釈である。アレントの思想史解釈に従い、古典古代から近代にいたる西洋政治思想史の伝統が、必然的な結末でないにしても、全体主義を招来するにいたったその理路を、本書は見事に整理している。第二部では、アレントのアイデンティティを、彼女の自己認識に従って「ユダヤ人女性」として定位しながら、全体主義に抗う「新たな公的領域

の構築の可能性」をめぐる苦闘を彼女の著作に寄っていく。本書の明らか

な特徴であり美点は、アレント自身の書いたもの

「失われた宝」を取り出す

「評議会形式」の政治

高田 宏史

によりアレントの思想の全体像を構築しようとしている点である。アレント自身の著作は独特の晦渋さがあり一般読者には容易に近寄りづらい。また、彼女の広範囲にわたる著述活動のゆえ、各著

作相互の関係は簡単に見通すことができないほど複雑である。本書はこうした難解なアレントの思想のテクストとコンテクストに、彼女自身の言葉

を再構成することで明快

な見通しを与えている。本書の「終わりに」において、引用だけで二冊の本を作り上げようとしたベンヤミンの試み——この試みはアレント自身も注目し、その方法を海に沈んだ「失われた宝」を探し求める「真珠探り」にたとえている——への言及がある。その意味で

「失われた宝」を取り出すには、アレントの思想の根底にあるものを探し出す必要がある。本書は、アレントの思想の再解釈を通じて西洋政治思想史の伝統の中の「失われた宝」を取り出すこととする試みであると言えよう。

では、そこで取り出されるべき「失われた宝」とは何であるのか。それは「評議会方式」の政治である。パリ・コミューンや六八年の学生叛乱にも見られた、「下からの」イニシアティブによって構築される「新しい公

ハンナ・アレント 〈世界への愛〉

の思想と生涯

中山 元



アレントの思想と行動の根底にあるもの

全体主義の源流から現代社会まで、詳細な分析としてアメリカに居住したアレントは、いかにして「政治的変革」を志向したのか。その経緯をアレントの著作・書翰などに丹念にたどりながら、彼女の思想と行動の根底にあるものを追いつかす。著者自身の力作。

A5判・512頁・5985円

新曜社

978-4-7885-1341-9

的領域」の可能性——ここにこそ、アレントの政治思想の魅力が存在しているのだから。代議制に対する不信が蔓延し、民主主義自体がその活力を低下しているように思われる現代にこそ、アレントの試みは繰り返し参照されるべき意義がある。とりわけ三・一一以降、原発事故の影響により多くの人がびとが未だに「難民」であることを強いられ、また、脱原発デモなどを通じて新しい公的領域の可能性をそこに垣間見た本邦において、アレ

ントの思想が再び脚光を浴びているのは、ゆえなきことではないのである。自発的結社に基づく評議会方式の政治から、従

来の主権国家とは異なる新しい国家の概念が誕生することを、著者は「アレントの夢」と表現している。確かにそれは具体的ななかたちを伴った堅牢な構想ではなく、「夢」と呼ぶほかないものである。しかし、夢や希望を喪失した民主主義に未来は存在しているのだろうか。私たちは、アレントの思想を通じて、そして彼女が苦闘を続けてきたさまざまな難問を再吟味することを通じて、民主主義の「夢」に触れることができるのである。たかだ・ひろふみ氏 法政大学兼任講師・政治学専攻

★なかやま・げん氏は哲学者・翻訳家。東京大学中退。著書に「思考のトポス」「フーコー 思考の考古学」「フーコー入門」「はじめて読むフーコー」など。訳書にアレント「責任と判断」「フーコー 真理とディクスタイル」など。一九四九年生。

学術

思想